

# 内発的動機付けを促進する親表象

## —自我心理学による再構成—

荻本 快

### 1. 内発的動機付けと自己決定理論について

「子どもが、どうしたら自ら進んで勉強するだろうか？」という問いは、教育心理学における主要な研究領域を形作っている。内発的動機付けである。

内発的動機付けとは、個人において特定の活動が自発的に起き、その個人が当該の活動に従事すること自体に楽しさや喜びを感じている状態のことである。例えば、子どもが内発的動機付けによって勉強しているとき、その子どもは、親や教師に言われなくても、教科書やノートを開き、教科書を読み、課題に取り組む。そして、新しい知識を身につけることそれ自体に喜びを感じ、さらに勉強を続けようとする。

内発的動機付けは、最も健康的で葛藤的でない動機付けである。健康な子どもは誰かに強要されるわけでもなく、勝手に遊ぶ。自発的であることは、遊びの要素だと言えよう。一方、子どもが自発的に勉強するというのは稀であり、だからこそ子どもに勉強させたいと願う親や教師を悩ませる。勉強やスポーツなど、社会的に望ましいとされる行動の中には、内発的動機付けが成立し難いものが多い。

親や教師が、子どもに勉強させたいと悩んだ末に、「勉強したらいい成績をあげよう」と言うことや、「テストでいい点を取ったらごほうびをあげる」と言うことがある。それによって子どもは重い腰を上げて勉強をするかもしれないが、それは一時のことである。一夜漬けの習慣が定着していく。

個人が、成績やご褒美等といった、報酬のために活動することを外発的動機付けという。もともと自発的に生じていた行動に対して、報酬を与え続けると、その行動の動機は楽しさや喜びといった内的なものから、ご褒美という外的なものへとシフトしてしまい、結局はご褒美がないとその行動が生じなくなることがある。アンダーマイニング効果である(Lepper, Greene, & Nisbett, 1973)。教育現場は子どもが内発的動機付けによって勉強するように努力している一方で、子ども達の周りには外発的動機付けへとシフトしてしまうような刺激が満ちている。外発的動機付けで生じている活動を、どのように内発的動機付けへと転換させていくかという課題がある。

外発的動機付けと内発的動機付けは互いに独立して検討されてきた。それに対して、デシとライアン(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000)が自己決定理論を提唱した。彼らは外発的動機付けから内発的動機付けへの過程モデルを提案したのである。それまで別々の領域として扱われてきた外発的動機付けと内発的動機付けが、自己決定理論によって一つの過程の中で連続的に検討されるようになった。つまり、最初にご褒美が欲しくて始めた活動が、いずれはその活動をすること自体に喜びを感じて行うようになることを示したのである。

その発達過程を、彼らは「内在化(internalization)」の概念によって説明している。大人は望ましいと思う活動を子どもにさせようとする。しかしその活動が常に自発的に起きるとは限らない。そのため、社会化の過程では、活動の生起と持続は、はじめは外的に制御されるが、いずれは子どもが自分で活動を自律的に制御するよう、発達がおすすめる。制御の最初の発達段階では、活動は外的な欲求充足や報酬のために行われる。次の発達段階は、取り入れ的調整と呼ばれ、活動は、罪悪感や不安を避けようとして、あるいはプライドを保つ、高めるために行われる。三番目の段階である同一視的調整では、個人は活動の目標や制御することの価値に対して同一視しており、その活動を重要であると思っている。最後の発達段階では、同一視的調整が自己に完全に吸収されていて、自己におけるその他の価値や必要性と一致している。これを統合的調整と言う(Ryan & Deci, 2000)。

本邦では、三番目の調整である、同一視的調整(identified regulation)は「同一化的調整」と訳されてきたが、後に述べる精神分析的発達理論とのつながりで、本稿では同一視的調整の訳語を用いる。

この理論が評価されるのは、彼らによる動機付けの内化過程モデルによって、別々に扱われてきた外発的動機付けと内発的動機付けが、連続したものとして検討されるようになったことが第一である。また、発達の観点を導入したことで、個人が行っている活動の様態を観察することで、このモデルにのっとり動機付けの発達水準を査定できるようになった点も意義深い。発達上の固着、停滞、退行現象といった臨床心理学的な事象についても、動機付けの観点から査定していく指標を提供したことも大きい。彼らが、動機付け理論に発達の観点を導入したことで、既存の発達理論と動機付け理論の統合が可能になったことは言うまでもない。

Ryan & Deci(2000)が動機付け理論を発達理論として構築した際に、準拠したのが内在化理論であるが、同一視概念が主要な役割を担っていることは前述の通りである。しかしながら、自己決定理論に基づき、子どもの学業における内発的動機付けの内化機構を検討しようとする実証研究において、自我による同一視という機能が用いられていない。これは特に最近の調査研究で顕著である。そこで本論では、子どもの学業における内発的動機付けの内化機構についての研究を、同一視概念を鍵概念に、自我心理学的観点から評価し、本研究領域における課題と展開可能性を明瞭にすることを目的とする。

## 2. 親子関係

動機付けの内化をもたらすのは、子どもに関わる大人である。子どもの勉強・学業に関わるのは、はじめは母親、父親であり、後になって教師が登場する。教師の指導や態度と、子どもの学業における内発的な動機付けの関連については、一つの研究領域を成している(e.g., Ryan & Grolnick, 1986)。学校場面での子どもの学業への動機付けに対する教師の役割の大きさは言うまでもない。重要な対象としての教師が子どもにどのように内在化され、内発的動機付けに影響を与えるかについては、稿を改めるとして、本論では、子どもの発達における最初の対象である親と子の関係に焦点をあてる。

内発的動機付けの内化に関係する親についての研究は、ライアン(Ryan, Stiller, & Lynch, 1994; Grolnick, Deci, & Ryan, 1997)に始まり、内在化機構における親表象の影響が調査されてきた。その後内在化に関する研究は、グロルニック(e.g. Grolnick & Ryan, 1989; Grolnick, 2015)が主要な役割を担うようになる。彼女は、自己決定理論に基本的に準拠しながらも、親表象の概念から離れ、親子の相互作用に焦点をあてていく。特に、親の養育態度について、一連の詳細な研究を行っている。

例えば、Grolnick, Deci, & Ryan (1997)では、親が子どもをコントロールすることと、構造を置くことの違いを区別した上で、親が子どもをコントロールすることより、構造を置くような養育態度を取るときに、子どもの動機付けが高いことを示している。この研究に端を発する親の養育態度についての研究は、その後も展開し(Pomerantz, Moorman, & Litzwack, 2007)、Grolnick(2012)は、子どもの内発的動機付けを育成する親の養育態度は、サポータティブであり構造がきちんとしていることであると結論づけている。

親の養育態度についての研究は深化し、親がどのように子どもの学業に参加(involve)しているかが検討されている。親の参加は、学校でのプログラムの参加と、家庭での宿題などへの参加に区別されている。その結果、全く関わらないことも肯定的な影響を及ぼさないが、一方で親の学校への関わりが過剰であることは、子どもの内発的動機付けを阻害することを見出している。彼女は、家庭での親による子どもの宿題への参加が、子どもの内発的動機付けに関連することを強調している。

最近では、Grolnick(2015)は子どもの宿題への参加についての親自身の内発的動機付けが、子どもの内発的動機付けと関連するという調査結果を発表した。子どもが親に宿題を教えてくれと頼むときに、親が面白そうに子どもに宿題を教えること、あるいは子どもが家に持って帰ってきたプロジェクトに楽しく共に取り組むことが、子どもが自律的に学業に励むことに関連することを示したのである。この研究が意義深いのは、内発的動機付けを促進する親についての研究は、親表象という精神的な領域から、親子の相互作用や親の養育態度といった対人関係水準での研究に着眼点を移したが、再度

Grolnick(2015)において、親自身の子どもの学業への参与についての内発的動機付けという、精神的な領域に焦点が回帰したことにある。

### 3. 研究展開可能性

#### 3-1 表象に着目する意味

Grolnick(2015)の研究によって、親の学業に対する内発的動機付けという、親の精神的な特徴によりやく着目点が戻った。しかしながら、彼女は、何故、子どもの宿題への参与についての親の内発的動機付けが、子どもの学業に対する内発的動機付けに関連するのか、内在化に資する機構については論考していない。

ここにおいて、自己決定理論(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000)の意義に立ち戻る必要がある。前述したように、彼らの自己決定理論の意義は、内在化という過程の視点を導入したことで、内発的動機付けが発達することを浮き上がらせたことにあった。その際に彼らが批判をした上で準拠していたのが、自我心理学における「同一視(identification)」の機制であった。しかしながら、Grolnick(2015)の考察では、同一視機制は使用されていない。

元々の自己決定理論(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000)では、自我の概念も、自我機能の一つである同一視機制も重要視されているが、自己決定理論の貢献である内在化過程理論を踏まえ、内在化の機構を明らかにしていくためにも、自我による同一視という観点を導入して、Grolnick(2015)による研究成果を考察していく必要があるのではないか。

ライアンらの研究グループ(Avery & Ryan, 1988; Ryan et al., 1994)も、子どもの内発的動機付けに与える内在化の影響について、子どもによって認知された親像つまり親表象(parental representation)に着目して検討を行っていた。親の養育態度と、子どもの活動の間をつなぐ媒介変数が、親表象である。Freud(1914/1925)は、表象について「自己に対する自我の態度」と形容している。それ以降、心的表象について、Hartman(1950)やJacobson(1961, 1964)が理論を展開させた。Besser & Blatt(2007)は、親表象を「子どもが、親との早期の相互作用を、自己と他者の認知情緒的シエマとして変換させたもので、その後の行動を調節し方向付ける機能を持つ」と定義している。これらの理論家は、親表象が同一視の自我機能によって形成されていると述べ、特にブラットら(Behrends & Blatt, 1985; Blatt & Blass, 1990)は、愛着理論と自我心理学の統合を試み、表象の質に、同一視機制の成熟度が反映されることを示している。自己決定理論(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000)における発達モデルにおいても、同一視的調整(identified regulation)に、「同一視」の概念が用いられており、取り入れから同一視という展開はまさに精神分析における内在化理論(Kernberg, 1976; Meissner, 1981)に強く影響を受けている。しかし、彼らは自分達の同一視が精神分析における同一視とは異なるものであることを主張しようとして、「精神分析における同一視は人(person)に対して行われるが、私達が言う同一視は、その人の成し遂げていることに対して行われるのである」(Ryan & Deci, 2000, p.137)と言っているが、自我心理学の観点から見れば、前者と後者の同一視は独立したものではなく、これも発達過程の中に位置付けられるものである。例えばJacobson(1964)は、人に対する同一視を、全体的同一視(一次的同一視)と呼んでいるし、後者の同一視を二次的同一視あるいは部分的同一視と呼んでいる。乳幼児期の同一視は「その人」に対する同一視であるが、児童期以降には同一視は二次的同一視になる。二次的同一視を用いることで、子どもは、同一視する対象その人だけでなく、対象のもつ特性に対して同一視をするようになる。Blatt(1974)は、同一視の発達によって、子どもは対象のもつ信念や価値に対して同一視をするようになり、それが親表象に現れると説明している。二次的同一視は、ライアンとデシの言う同一視と同じ機能を果たしていると言ってよい。つまり、親の持つどのような特性に対して二次的同一視しているかが現れるのである。

子どもと親が一つの活動を共有することで、模倣から同一視という内在化の展開が生じる(荻本, 2014)。幼児によって知覚された親が示す動作が、幼児の精神的に表象化され、それ故に「内在化を可能にし、幼児の模倣による動作は延滞・遅延しても生じる」(Piaget, 1932)。このような内在化された模倣こそ、

厳密な意味での同一視の証拠である(Spitz, 1957)。宿題をすることが、子どもと親に共有された活動であると考えたときに、Grolnick(2015)の結果について、説明することができる。

子どもが家で宿題をしているときに、分からないところが出てくると、親に聞きに行く。親が子どもに宿題を教えることを楽しんでいるときに、子どもはその親の「楽しく勉強をする」という自我の動きに対して同一視する。なぜならば、親と子は宿題をするという活動を共有しており、子どもは親と共に宿題に取り組むことで、親の宿題を解く行動を観察し、思考すること、問題に取り組む姿勢を模倣しているからである。もし親が宿題を教えることに内発的に動機付けられていない場合には、それでも親は「勉強は大事なもの」「勉強は必要なもの」という価値付けをしているからこそ、その価値付けによって子どもに宿題を教えるであろう。その場合には、子どもは親が感じている価値に対して同一視し、同じように神妙に勉強に取り組むだろう。こうして、親が持つ価値基準への同一視によって、子どもは自らが勉強をすることを制御する。

### 3-2 三者関係について

以上見てきたように、グロルニックの最近の研究は、主に親子関係の中でも、二者関係（特に母子関係）に焦点を当ててきている。一方、動機付けの内化過程を提唱した Ryan et al.(1994)は、母親に限定せず、父親も含めた複数の対象表象が、子どもの動機付けに関連することを示している。また、Grolnick & Slowiaczek(1994)も、母親だけでなく父親による子どもの学業への参加が、子どもの自己効力感に関連していることを見出した。父親と母親では、その関連のパターンは異なるが、両親が子どもの学業に参加することが、子どもの動機付けを促進する結果が示されていた。しかしながら、その後、グロルニックは子どもの学業に対する養育態度についての研究を進める中で、母子関係に注目し、なぜか父親を含めた父-母-子の三者関係については検討していない。子どもの学業への動機付けに影響する要因の焦点が、家庭における子どもの宿題に対する親の態度へと絞られてきて、改めて父親を含めた親子関係について検討され始めている。Bouchard, Lee, Asagary, & Pelletier(2007)は、父親が妻から父親として認められていることが、子どもの勉学や学業などの活動に父親が参加することと関連していることを示している。

一連の研究が明らかにしようとしているのは、内発的動機付けが核家族でしか起きないということではない。より中立的な視点でこの問題に取り組むとするならば、単に両親が揃っていれば内発的動機付けが促進されるという単純な結論に拘泥するのではなく、その中身にまで踏み込んだ検討を行う必要がある。父-母-子の三者関係のダイナミクスが、子どもの内発的動機付けに影響を与えるとして、父-母-子の三者関係に代表される現象において、何が要素となって、内発的動機付けが促進されるのか、それこそ明らかにされなければならない。

Bouchard et al.(2007)による対人関係レベルについての研究の限界がここにある。父-母-子の三者における対人関係の変数にのみ焦点を当てていると、内発的動機付けを押し進める変数が、あくまで対人関係的な水準に留まり、その結果、研究の意義は、母子家族・父子家庭か核家族かという社会的なレベルの議論におさまってしまう。なぜ父親と母親の両方なのか、そして、性別の違いという具体的(concrete)な変数の奥にある、三者関係で生じる心理的機能にまで踏み込んで検討していかない限り、一連の研究成果を真に意味のあるものとして教育臨床現場で活かすことはできないだろう。

表象について検討する意義がここにも見出される。子どもによって認知された父-母-子の三者関係は、三者関係表象あるいはエディプス複合(Freud, 1905/1949; Tyson & Tyson, 1990)と呼ばれてきた。対人関係的領域における変数を扱っている限り、三者関係のもたらす意味は、両親が揃っている子どもに限定されてしまうが、精神内的な三者関係を検討していくことで、社会的な状況を越えた視点から結果を考察できよう。精神内的の世界においては、実際の父-母-子という三者関係には限定されない、複数の重要な対象が表象されており、その対象同士は表象世界の中で関わり合っている。例えば祖父と実母と自分、あるいは実父と教師と自分といったように。

この点については、自己決定理論を提唱した理論家たちも、「親表象は、親から教師やほかの対象へと

転移する」(Ryan et al., 1994, p.244)と言っている。対象表象を実証的に検討する方法として、Object Relation Inventory(Blatt, Chevron, Quinlan, Schaffer, & Wein, 1992)が開発され、三者関係表象を取り扱う方法としても利用されている(Besser & Blatt, 2007; 荻本, 2010; 荻本, 準備中)。愛着研究の文脈においても、三者関係における愛着が検討されてきている(Al-Yagon, 2011; Gitanjali, 2013)。これらの方法を用いて、子どものもつ父-母-子の三者関係表象が、内発的動機付けに与える影響を検討することで、対人関係レベルでの三者関係にも共通な要素は何なのかを明らかにする必要がある。

例えば、伝統的な精神分析の観点から、Grolnick & Slowiaczek(1994)や Bouchard et al. (2007)の結果を見たときに、父-母-子の三者関係において、妻が夫を父親として認めており、子どもが父と母の間にリビドー結合があることを認知していることが、同一視の発達を促進するという考察になるだろう。フロイトが言うように、エディプス複合において、子どもの心的構造は分化する。Ryan & Deci(2000)も、エネルギーが動機として結実する際には、人格がより構造化する必要があると述べている。子どもが三者関係表象を体験することで、子ども的人格はより構造化する方向へ発達する。エネルギーが機能的に使われることで、子どもは楽しさを体験する。即ち内発的に動機付けられていくと考えられる。これらの機構を検討していく鍵概念となるのが、「表象」であり、自我が表象を形成する際に機能する「同一視」である。これらの変数を基軸に、この分野の研究を進めていくことで、単に父と母が揃って子育てをしていることの奥にある、三者関係が子どもの内発的動機付けを押し進める要因は何なのかを見出していくことができるだろう。

## 引用

- Al-Yagon, M. (2011). Adolescents' subtypes of attachment security with fathers and mothers and self-perceptions of socioemotional adjustment, *Psychology*, 2(4), 291-299.
- Avery, R. R., & Ryan, R. M. (1988). Object relations and ego development: Comparison and correlates in middle childhood. *Journal of Personality*, 56, 547-569.
- Behrends R., & Blatt, S. J. (1985). Internalization and psychological development throughout the life cycle. *Psychoanalytic study of the Child*, 40, 11-39.
- Besser, A. & Blatt, S. J. (2007). Identity consolidation and internalizing and externalizing problem behaviors in early adolescence. *Psychoanalytic Psychology* 24(1), 126-149.
- Blatt, S. J. (1974). Levels of object representation in anaclitic and introjective depression. *Psychoanalytic Study of the Child*, 29, 107-157.
- Blatt, S. J. & Blass, R. (1990). Attachment and separateness: A dialectic model of the products and process of psychological development. *The Psychoanalytic Study of Child*, 45, 107-127.
- Blatt, S. J., Chevron, E.S., Quinlan, D. M., Schaffer, C. E., & Wein, S. (1992). *The assessment of qualitative and structural dimensions of object representations* (Rev. ed.). Unpublished manual. Yale University, New Haven, CT.
- Bouchard, G., Lee, C.M., Asgary, V., & Pelletier, L. (2007). Fathers' motivation for involvement with their children: A self-determination theory perspective. *Fathering*, 5(1), 25-35, 37-41.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- Freud, S. (1925). On narcissism: An introduction. In J. Strachey (Ed. & Trans.), The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud (Vol. 14, pp.67-102). London, England: Imago Publishing. (Original work published 1914)
- Freud, S. (1949). *Three essays on the theory of sexuality*. In J. Strachey (Ed. & Trans.), The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud (Vol. 7, pp.123-246).

- London, England: Imago Publishing. (Original work published 1905)
- Gitanjali, N. (2013). Differences in internalizing and externalizing problems among early adolescent subtypes based on attachment security. *Psychological Studies*, 583, 122-132.
- Grolnick, W. S. (2012). The relations among parental power assertion, control, and structure. *Human Development*, 55, 57-64.
- Grolnick, W. S. (2015). Mother's motivation for involvement in their children's schooling: mechanisms and outcomes. *Motivation and Emotion*, 39(1), 63-73.
- Grolnick, W. S., Deci, E.L., & Ryan, R. M. (1997). Internalization within the family: The self-determination theory perspective. In J. Grusec & L. Kuczynski (Eds.), *Parenting and children's internalization of values: A handbook of contemporary theory* (pp. 135-161). New York: John Wiley.
- Grolnick, W. S., & Ryan, R. M. (1989). Parent styles associated with children's self-regulation and competence in school. *Journal of Educational Psychology*, 81(2), 143-154.
- Grolnick, W. S., & Slowiaczek, M.L. (1994). Parents' involvement in children's schooling: A multidimensional conceptualization and motivation model. *Child Development*, 65, 237-252.
- Hartman, H. (1950). : Comments on the psychoanalytic theory of the ego, In *Essays on ego psychology*, New York: International Universities Press.
- Jacobson, E. (1961). Adolescent moods and the remodeling of psychic structures in adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*. 16, 164-183.
- Jacobson, E. (1964). *The self and the object world*. New York: International Universities Press. (ジエイコブソン, E. 伊藤洸(訳) (1981) 自己と対象世界 岩崎学術出版社)
- Kernberg, O. F. (1976). *Object relation theory and clinical psychoanalysis*. New York: Aronson. (カーンバーク, O. F. 前田重治監(訳) (1983) 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版社)
- Lepper, M.R., Greene, D., & Nisbett, R.E. (1973). Undermining children's intrinsic interest with extrinsic reward: A test of the "overjustification" hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 129-137.
- Meissner, W. W. (1981). *Internalization in psychoanalysis*. New York: International Universities Press.
- 荻本快 (2010). 同一視編成理論の発達理論における意味 国際基督教大学教育研究, 54, 145-153.
- 荻本快 (2014). 幼児の自己制御を育む父子遊びの発達力動理論—介入プレイ観察による力動理論の構成—. 国際基督教大学教育研究, 56, 81-87.
- 荻本快 (準備中). 青年期初期における両親への同一視の意味.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York, NY: Free Press.
- Pomerantz, E. M., Moorman, E.A., & Litwack, S. D. (2007). The how, whom, and why of parent's involvement in children's academic lives: More is not always better. *Review of Educational Research*, 77(3), 373-410
- Ryan, R.M., & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R. M. & Grolnick, W. S. (1986). Origins and pawns in the classroom. Self-report and projective assessments of individual differences in children's perceptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 550-558.
- Ryan, R. M., Stiller, J. D., & Lynch, J. H. (1994). Representations of relationships to teachers, parents, and friends as predictors of academic motivation and self-esteem. *Journal of Early Adolescence*, 14, 226-249.
- Spitz, R. A. (1957). *No and yes: On the genesis of human communication*. New York,

NY: International Universities Press.

Tyson, P. & Tyson, R. L. (1990). *Psychoanalytic theories of development: An integration*. New Haven: Yale University Press. (タイソン, P.・タイソン, R. L. 馬場禮子 (監訳). (2005). 精神分析的発達論の統合①. 岩崎学術出版社. タイソン, P.・タイソン, R. L. 皆川邦直・山科満 (監訳). (2008). 精神分析的発達論の統合②. 岩崎学術出版社.)